

なじまあ

親しみ深きアジア
—Accessible Asia—

NAJIMA

NAjia=Asia

編集後記
なじまあ
親しみ深きアジア
—Accessible Asia—

今回はアジア・アフリカ特集です。表紙に掲載されているナイジェリアの学生の拱手、伝統的な仮面儀礼を手助けするトヨタ車、そしてスシ・ドーナツやヤム芋…「なじみ深いアジア(アフリカ)」は、今や世界のどこにでも。先日参加したアフリカの布に関する講演会で、1960年代にアフリカに渡って布生産に尽力した日本の紡績事業のお話を聞きました。彼らが創った「アフリカ布」には日本の浴衣っぽいテキスタイルデザインもあり。そんな「アフリカ布」は、今やおしゃれなエスニックアイテムとして日本に帰還。「アフリカっぽさ」「エスニック」とは何ぞや? 今回の『なじまあ』で取り上げられているお茶、銅印、建築、遺伝子などのトピックも、歴史や地域を越えたつながりなくしては語れないものでした。フィールドで出会う現実、思いもよらぬつながりばかり。悲劇的な分断ばかりが報じられる今日ですが、私たちの仕事の一つは、人間があらゆるところで紡いできたつながりとともにある生を、可笑しみや驚きと一緒に伝えてゆくことかもしれない、と思うこの頃なのです。(橋本栄莉)

本特集には、アジア・アフリカの新たな交流や受容・変容が誌されています。昨年末、地域循環共生を実証的にとらえる国際ワークショップに、南アフリカとラオスから長年お世話になっている仲間を招き1週間ほどともに過ごしました。お互いにすぐに打ち解けて仲良くなりました。農業やいなかの暮らし方の発想には作物や土地は違えど共通するものも多くあります。10名ほどのメンバーが集い、ベトナム料理を囲んで交流会も盛り上がりました。そのうち一人が「アフリカを豊かにすることが目標です」といいました。すかさず別の人が「アフリカは豊かだったんです」と返しました。世界の歴史をふまえて、生まれも育ちも違っても共感できることが大切です。今年からそれぞれの土地を訪問して共同調査を進めていきます。それぞれの価値観を理解し、共感し、交流し、新たな知見を生み出して、アジア・アフリカから世界にむけて新たな論理を発信していくこと、本誌がそのための情報をどんどん提示していけるよう編集を進めてまいります。(野中健一)



特集
つながるアジア・アフリカ

世界のおじさん・おばさん ⑬

2022年の8月、5年ぶりにバブアニューギニアを訪ねた。地方都市ウエフクで久しぶりに私を出迎えてくれたのが写真のポール・コソフ氏(右)である。彼は日本で半年ほど日本語を学んでいた経験があり、私が調査を行う際にはいつも協力してくれる優秀な助手である。最近では物価の上昇が激しくて生活は楽ではないと語っていたが、いつの間にか再婚していて、おばさんと呼ぶには申し訳ない若い奥さんを紹介してくれた。(豊田由貴夫)



なじまあ -Accessible Asia- 13号

- 発行/2023年3月31日 ●編集/立教大学アジア地域研究所 橋本栄莉 野中健一
- 制作/たまさや ●デザイン/犬山ハリコ ●印刷/株式会社シュービ ●ISSN 2188-8213



立教大学アジア地域研究所 〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel:03-3985-2581 Fax:03-3985-0279 E-mail:ajiken@rikkyo.ac.jp https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/caas/

ひろく動くアフリカの人々/栗田和明
ケープタウンのお寿司/シ・ゲンギン
日本でヤムイモの収穫祭を祝う/松本尚之
アジア・アフリカ混濁の奔流-梨泰院に湧出するアフラシア世界/和崎春日

橋本栄莉 豊田由貴夫 今野純子 石黒ひさ子・王麗
工藤正子 大橋健一 工藤裕子 高橋孝治

13

No.13 2023

なじまあ

親しみ深きアジア

— Accessible Asia —

No.13 2023 contents

13

特集／つながるアジア—アフリカ

- ひろく動くアフリカの人々／栗田和明 4
- ケープタウンのお寿司／シ・ゲンギン 6
- 日本でヤムイモの収穫祭を祝う／松本尚之 8
- アジア—アフリカ混濁の奔流—梨泰院に湧出するアフラシア世界／和崎春日 10

コラム

- 南スーダンで出会った「日本語」たち／橋本栄莉 12

講演会報告

- オセアニア史の語りにおける系譜と遺伝とその交錯／豊田由貴夫 13

論考

- 石垣島へ渡った台湾人と台湾茶—台湾総督府茶業伝習所の卒業生と石垣島の茶業／今野純子 15

海域学コレクション

- 今帰仁城出土銅印をめぐる／石黒ひさ子・王麗 18

教壇から

- インドネシアとつながる—国内の体験学習とオンライン講座をとらえて／工藤正子 22

アジアの本棚-Book review-

- 『香港と「中国化」—受容・摩擦・抵抗の構造』／大橋健一 23

研究員紹介

- ジャカルタと神戸をつなぐもの—マッチを通じた華人ネットワーク／工藤裕子 24

フィールドから

- 台湾・中山樓訪問記と中華民国憲法／高橋孝治 25
- 編集後記／橋本栄莉 野中健一 28
- 世界のおじさん・おばさん／豊田由貴夫 28

●「なじまあ」とは

身近なアジア、親しみあるアジア、行きやすいアジア。「親しみ深い」というコンセプトを一言でいうと「なじみ」。「アジアになじむ」という意味をこめて、日本語で「なじまあ」というタイトルを思いつきました。NAJIMIにASIAをかけています。「〜まあ」のいい方で「アジアになじもうよ」という勧誘の意も表しています。

表紙写真／ナイジェリアで中秋節を祝う／舞台上立つ孔子学院の生徒たち
／撮影：松本尚之

右ページ写真／(上段)南アフリカ・ケープタウンの回転寿司屋／撮影：シ・ゲンギン
(下段)ガーナにて／儀礼用の巨大な仮面を日本の中古車が運ぶ／撮影：松本尚之



特集
つながる
アジア
アフリカ

ひろく動くアフリカの人々

文・写真／栗田和明

くりた・かずあき／立教大学名誉教授。立教セカンドステージ大学教員。理学博士
京都大学大学院博士課程修了。専門は文化人類学。著書は『アジアで出会ったアフリカ人——タンザニア人交易人の移動とコミュニティ——』（昭和堂）、編著『移動と移民——複数社会を結ぶ人びとの動態——』（昭和堂）、共編著『タンザニアを知るための60章 第2版』（明石書店）など。



(左) 写真1／国際運行されるバス。フロントガラスにDARダルエスサラーム(タンザニア)、LGEリロングウェ(マラウイ)、HARAREハラレ(ザンビア)の文字が見える(リロングウェ、マラウイにて)
(右) 写真2／南アフリカにあるタンザニア人レストラン。左奥はタンザニア人経営のガレージ(ヨハネスブルグ)



アフリカ内での動き

本誌ではアジア／アフリカという視点が設定されているが、じつは人や物がアフリカ内を移動する場合と、アジアまでおよぶ場合とで、定性的な違いを際立たせることは難しい。アフリカ内での移動とアフリカ／アジアの移動の対比は長大なスペクトラムのなかの変異として見たい。したがって、この小論ではアフリカの複数国を結ぶ事例から示そう。

アフリカを中心にした地域で、歴史的にも活発な人の動きがあった。古くは現生人類の拡散、各言語集団の話者の移動、サハラ砂漠縦断やアフリカ大陸東海岸沿いの長距離交易、奴隷貿易や植民地政策による影響などである。これらを通覧するのは、この小論にはあまるので、現在の例を示そう。

アフリカ諸国の多くは陸続きであり、国境越えは難しくない。たとえば、タンザニ

ア／マラウイの国境のソングウェ川では、人々は日常的に徒歩や丸木舟で対岸にわたる。また、ケニア／スーダンの国境は地形上の目印が見当たらず、意識しないうちに他国に入っていることもある。ここで生活する遊牧民も家畜とともに国境をかるく渡る。

アフリカ諸国は陸続きなので、バスでの国際移動が便利である(写真1)。国境を越えて運行するバスは多数あり、これに乗って他国に買い出しに行く。たとえば南アフリカで販売される物資は東・南部アフリカの人々を惹きつけ、買い出しの目的地になっている。自分の必需品だけでなく、手荷物と見なされる(税金がからない)範囲で多くの物を購入し、帰着後に転売するのはありふれた光景である。

国際バスのターミナルで人々の様子を眺めているのも楽しい。多くの人と荷物が行き交い、近くには旅行者に食事を提供

する小さな店が営業している。筆者は、タンザニア人レストランをマラウイ、ザンビア、南アフリカ、そしてバスターミナルではないが、ドバイ、ロンドン、香港、中国の広州で訪問し、タンザニア人がつくった食事を楽しんだ(写真2)。もちろん、各地ではタンザニア人レストランだけではなく、ナイジェリア、ガーナ人などのレストランもよく見かける。

アフリカ／アジアの動き

アフリカの人々のアジアとのつながりでは、オマーン、カタール、ドバイなどの湾岸諸国も主要な国であろう。湾岸諸国で入手した布製品、装飾品、時計などが交易品としてアフリカに持ち込まれている。しかし近年、とくに2001年(中国のWTO加盟の年)以降、次第に中国やその他の東・東南アジアの国々から品物が持ち込まれることが多くなっている。

写真3／間口2メートル程度の店舗。右端が店のオーナーで、年間20回程度は広州と往復して商品を仕入れる(ダルエスサラーム、タンザニア)



(下左) 写真4／広州空港でルアンダ(アンゴラ)行きの航空機に大量の手荷物をもってチェックインする人々(広州、中国)
(下右) 写真5／広州で営業するタンザニア人美容師(広州、中国)



一定の才覚と野心をもった青年が、居住しているアフリカの地から、たとえば中国に交易品を求めて出かけることは例外的なことではない。すでに中国に行っている親族や同郷の者をたよったり、同国人のエージェントを利用したりできる。たとえばダルエスサラーム(タンザニア)のマーケットで間口2メートル程度の店を構えている者が、定期的に広州に出かけて衣料品を持ち込んでいる(写真3)。彼らの店は、近隣地域内での商品の流通にかかわっているだけに見えるかもしれない。しかし、店主が頻繁に国外に買い付けにでかけ、客も近隣国からきている場合がある。ローカルな「商売」をしているようにみえる場でも、直接的に人と物が「国際的」に移動している。つまり「国際的な商売」が見られる。この「国際的」と「商売」の語のつながりがすっきりと耳に入らないのは、私たちの先入観が邪魔しているか

らであろう。

安い航空運賃と手荷物重量制限を大幅に緩めた制度(たとえばエコノミークラスで60キロ)(写真4)を提供している航空会社の存在は、アフリカ人のアジアへの移動を加速している。また、商談はインターネットによって飛躍的に便利になった。中国などに長期間滞在しているアフリカ人留学生、調理人、美容師、などがエージェントとして手助けするので(写真5)、交易人が単身でかけても不安は少ない。買い付け、輸送、書類作成を手伝う専門のアフリカ人エージェントも存在している。

広州や深圳、香港、バンコク、ジャカルタ、シンガポール、ホーチミンシティ、など東南アジアの主要な都市では、交易人があつまる区域が出来ている。そこでは同国の料理のレストラン、美容院、情報共有の場、交易を助けるエージェントなどと接触

出来る。これらは国別に形成されているように見えるが、国の区別は必ずしも強くなく、共通の言語による絆も有効である。そもそも国境を越えて日常的に移動している者に「どこの国から来た」と厳密に問うても意味が少ないだろう。

交易以外

人々は交易以外の理由でも動いている。留学、冠婚葬祭、就業、また難民などの事情で動く場合もある。東アフリカ諸国で使われるスワヒリ語でテンベア(散歩する)という単語がある。これは居住地周辺を短時間散歩するだけでなく、遠方の知己を訪ねる小旅行や、明確な目的地がなくても新奇なところに数週間も旅する場合も含む。こうしたテンベアは自然な行動として見なされ、テンベアでアジアに来ているアフリカ人もある。あまり目的的でない移動もあることを最後に示しておきたい。

ケープタウンのお寿司

文・写真/シ・ゲンギン

Zi Yanyin (し・げんぎん) / 立教大学異文化コミュニケーション学部助教
2016年京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程単位取得、博士(地域研究)。専門はアフリカ地域研究、人類学。南部アフリカに進出したアジア系ビジネスについて研究を行う。著書はIron Sharpens Iron: Social Interactions at China Shops in Botswana (Langaa Research & Publishing Common Initiative Group 2017)。



写真1/ケープタウンの回転寿司屋



写真2/寿司屋のメニュー



写真4/相撲の絵番付



写真3/ニッポンの三猿の看板



写真5/Sushi Donut



写真6/キッチンの様子

ケープタウン

ケープタウンは南アフリカ共和国西部のケープ州に位置する都市である。港が有名であるとともに、世界的に有名なテーブルマウンテンや喜望峰などを含んだケープ草原のなかにあり、壮大な大自然と都市機能を兼ね備えたアフリカ有数の世界都市である。また、複雑な歴史をもち、豊かで多様な文化を蓄えているため、毎年世界中から多くの観光客を集めている。2014年のニューヨークタイムズの記事では、「世界で一番訪れたい街」に輝いた。

ケープタウンのお寿司屋

アメリカのオンライン旅行代理店サイト「トリップアドバイザー」で検索した結果によると、デリバリーを含めて、ケープタウンには寿司屋が200軒以上ある。南アフリカに長く住んでいる日本の方の話では、本格的な寿司屋はわずかだが、あまり訓練さ

れていないアフリカ現地人のシェフを雇ってカリフォルニア・ロールのようなものを出している店は町中に溢れるほどあるという。

ケープタウンでこれほどお寿司が普及していることには驚かされた。何軒かの回転寿司屋を訪ねてみると、現地人スタッフや中国人スタッフがオープン・キッチンの真ん中に立って巻き寿司を作っている(写真1)。こうした風景が定着し、そう珍しくない、日常的なものになってきているようだ(写真2)。

「スリー・ワイズ・モンキーズ」の寿司ドーナツとシェフ

多くの日本料理店はいわゆる「日本人っぽい」店名を付けており、「Sato」、「Nobu」、「Edo」と書かれた店の看板が町中にあふれている。私はその中で一風変わった「スリー・ワイズ・モンキーズ」(Three Wise Monkeys)という名前のレストランに惹かれた。その店はケープタウ

ンの観光地シー・ポイント(Sea Point)にあり、周辺には中華料理店や洋食レストラン、カフェなどがたくさんある。入口にバーがあり、中には3、4人が座れるテーブル席が置かれている。店に入ると、だれでもまずは店のインテリアに惹かれると思う。ニッポンの三猿(見ざる、言わざる、聞かざる)の看板(写真3)や相撲の絵番付(写真4)、アニメ『ドラゴンボール』の主人公・孫悟空のイラストなどである。

話によると、この日本料理店はもともと有名なシェフ兼経営者である Seelan Sundoo が立ち上げた店で、若手白人経営者の手を経て、現在は中国人が経営しているという。スリー・ワイズ・モンキーズという店名の由来は「ニッポンの三猿」である。創立者たちは店のメニューを和食中心にしたため、店にも日本的な名前を付けたわけである。また、この店名は単に日本的なものというだけでなく、この意匠

に込められた良い価値観を学ぼうとする経営者たちの意志が表れている。つまり「悪を見るな、悪を聞くな、悪を言うな」ということである。

スリー・ワイズ・モンキーズで提供されている多くの料理は「和洋中折衷」と言えよう。和洋中をバランスよく、クリエイティブに組み合わせ、より美味しい料理を創作していると思う。メニューに写真は載っていないが、「Sushi Donut」を見た瞬間、驚いた。60ランド(約500円)と手頃な値段なので、思わず注文してみると、10分後、ドーナツ形のお寿司が目の前に届いた(写真5)。輪形に整えられたシャリに白と黒のゴマが振られており、この「ドーナツ」の上にはきれいにカットされたアボカドとマグロの切身が乗せられている。飾りとして、マグロの上には三粒の枝豆、「ドーナツ」の穴には真っ赤な花、そしてお皿の端には緑のワサビ、反対側の端には

ピンク色のガリが乗っている。なんときれいな芸術品だろうと思う。これはいったいドーナツなの?お寿司?それともおにぎり?シャリの部分はドーナツの形になっているが、食べ応えは硬めのおにぎりに似ている。醤油をつけると、マグロとアボカドが入っているカリフォルニア・ロールの味とそっくりである。枝豆は主に飾りとして使われているが、マヨネーズつきで、柔らかいマグロと合わせると絶妙な食感だ。

「オーセンティック」への挑戦

誰が作っているか気になって、思わずキッチンにいるスタッフに声をかけた(写真6)。シェフはお寿司用の長い包丁を片手に「僕はこの店の新米シェフです」と応じてくれた。お寿司の作り方はニューカマーである中国人のオーナーが教えてくれたそうである。日本の寿司屋では「シャリ混ぜは職人の腕の見せ所」とよく言っており、

寿司酢の味付けや米との配合比がお寿司の食感に直結する。しかし、さまざまな文化が混ざっているケープタウン、特に世界中から観光客が殺到するシー・ポイントではおそらくわざわざ本格的な日本食を求めてくるようなお客さんがいないので、できる限り食材費や人件費を抑えて、訪ねてきた人に「え、何?すごい、おもしろい」と思わせ、楽しく感じさせるのを第一の目的としているのではないだろうか。

これは、さまざまな移民文化が混ざっているケープタウンならではの現象ではないだろうか。ぎりぎりまで「オーセンティック」を求めながら、現地のニーズや限られた環境を最大限駆使して創造的な文化を作り上げ、コストパフォーマンス重視で生き残ろうとしている。これは南アフリカにいるほとんどのニューカマーに共通する戦略であり、スリー・ワイズ・モンキーズはその典型例と言えよう。

日本でヤムイモの収穫祭を祝う

文・写真／松本尚之

まつもと・ひさし／横浜国立大学教授。博士(文学)東北大学大学院博士課程修了。専門は文化人類学。2000年からナイジェリアでフィールドワークを行う。2006年よりアフリカと東アジアを結んだ人の移動に関心をもち、日本や中国でも調査を行っている。近著に『移民現象の新展開』(共著、岩波書店、2020年)、『アフリカで学ぶ文化人類学』(共編著、昭和堂、2019年)など。



写真1／故郷の祭りの様子。精霊に祈りを捧げつつヤムイモにナイフを入れる

横浜・寿町で祝う——2019年8月

2019年8月、横浜市の寿町に位置するかながわ労働プラザ内のホールにおいて、ヤムイモの収穫祭が開催された。ヤムイモは、アフリカで伝統的に主食として親しまれてきた栽培作物の一種である。祭りの主催は、日本イボ人協会(Igbo Association of Japan)。イボ人はナイジェリアの三大民族の一つであり、日本イボ人協会は日本に暮らすイボ人たちが民族の交流と文化振興を目的として2013年に設立した。現在、正規の在留資格を持ち日本に暮らすアフリカ人の数はおよそ2万人。そのなかで、国籍別人口において第一を占めるのがナイジェリア出身者である。在日ナイジェリア人の人口は3,474人で、その約8割(2,853人)が男性である。イボ人は、在日ナイジェリア人の多数派を占める民族でもある。

ヤムイモの収穫祭は「イリジ」(Iriji、「ヤムイモを食べる」の意味)と呼ばれ、イボ人たち

にとって民族文化を代表する伝統行事である。コミュニティのリーダーが収穫期を迎えたばかりのヤムイモにナイフを入れ、ヤムイモの精霊アヒアジョクの祝福を祈りながら食する(写真1)。この儀礼が終わるまで、人びとは新芋を口にすることが禁じられている。

言うまでもなく、日本の、それも国内有数の都市部に暮らすイボ人たちは、自らヤムイモを栽培しているわけではない。彼らははるばる故郷からヤムイモを取り寄せ、収穫祭を開催しているのである。祭りには、日本イボ人協会のメンバーやその家族に加え、友人たちやゲストも参加している。アフリカ人もいれば、日本人もいる。男性もいれば女性もおり、高校生くらいの若者もいれば、ベビーカーに乗った赤ん坊もいる。なかには、SNSなどを介した告知をみて、飛び入りで参加した日本人もいた。メンバーたちは、それら初見の日本人たちも暖かく迎え、食事や飲み物を振る舞った。仮面の踊り手たち

も登場し、盛大にその年のヤムイモの収穫が祝われた(写真2)。

東京・歌舞伎町で祝う——2006年9月

私が日本に暮らすイボ人たちの調査を始めたのは2006年のことであるが、そのきっかけもヤムイモの収穫祭であった。当時、調査の糸口を探していた私は、埼玉にあるアフリカン・レストランを訪れた際に、イボ人たちが組織する同郷団体の一つがヤムイモの収穫祭を開催することを知ったのだ。日本に暮らすナイジェリア出身者の数が増加したのは1990年代のことである。2000年代に入ると、日本で比較的安定した立場を得た人びとが中心となって、同郷者の相互扶助を目的とした団体を設立した。ヤムイモの収穫祭を企画したのは、2000年から2002年にかけて私がナイジェリアで長期のフィールドワークを行った際に滞在した地方の出身者である。祭りの開催場所は、新宿の歌舞伎町であった。



写真2／横浜・寿町での祭り。仮面の踊り手たち



写真3／東京・歌舞伎町における祭り。薄暗いバに人々がひしめく



写真4／横浜・寿町での祭り。壇上に上がった子どもたち

2006年9月に歌舞伎町で開催されたヤムイモの収穫祭は、雑居ビルの地下にあるナイジェリア人が経営するバーを借りて行われた(写真3)。故国の流行歌が大音量で鳴り響く会場には、多くのナイジェリア人がひしめき合っていた。スーツに身を包んだ者やカジュアルな洋服を着た者、ナイジェリアの伝統衣装に身を包んだ者など、装いは様々だ。なかには、イボ社会では首長の証である赤い帽子を被っている者もいた。

祭りは、夜の8時頃に始まった。会場にはおよそ80名の参加者がいたが、そのほとんどがナイジェリア人男性であった。10名ほどいた日本人はみな女性であり、子どもは5名ほどを見かけるに留まった。在日イボ人たちの集まりに初めて参加した私は、ここは本当に日本かと驚いたものだ。

再び横浜にて

2019年に横浜で開催されたヤムイモの取

穫祭の席で、日本イボ人協会のメンバーたちに祭りの開催理由を尋ねた。すると、多くの者が自分たちの子どもに故郷の文化を伝えるためだと答えた。日本イボ人協会は、日本で生まれた移民二世にあたる子どもたちを対象としたイボ語の教室を開いている。

2019年の収穫祭では、おそろいの伝統衣装に身を包んだ幼稚園児から小学生くらいの子どもたち約20名が壇上に上がり、イボ語によるスピーチを行った(写真4)。「*Aha m bu Chidi. Aha nam bu Ikechukwu.*」(私の名前はチディです。父の名はイケチュクです)。一人一人がイボ語で自分の名前を述べるとともに、自分の父が誰であるかを紹介した。自己紹介の前には「*Igbo Kwenu*」(イボ、クウェヌ)と、イボ人たちの集まりではおなじみのかけ声をかける。「*Isee!*」(イセー!)。かけ声に合わせて、大人たちもお決まりの合いの手を返す。みな、片言のイボ語を話す子どもたちの様子をうれしそうに眺めている。

ゲストのなかには、いくつかの同郷団体の役員たちもいた。それらの団体は、祭りの開催や言語教室の運営のための寄付金を用意していた。寄付を行った団体役員の一人名は、自分たちの組織が設立された2000年代を振り返り、「あの頃は自分たちのことで精一杯であった」と語った。

現在、日本に正規の在留資格を持ち滞在するナイジェリア人のおよそ3分の2(2,324人)が配偶者ビザや永住権を持ち、比較的安定した在留資格で日本に暮らしている。移民二世にあたる若者たちの存在が、メディアで取り上げられる機会も増えた。東京と横浜で開催された二つのヤムイモの収穫祭の変化は、日本に暮らすイボ人たち、ひいてはアフリカ人コミュニティの成長を物語っているだろう。

※文中の統計は、『総在留外国人統計』の2021年末のデータを用いている。また割合は、総在留外国人に占める割合を指す。

アジア-アフリカ混濁の奔流 —梨泰院に湧出するアフラシア世界

文・写真／和崎春日

わざき・はるか／京都精華大学アフリカアジア現代文化研究センター客員教授。博士(社会学)慶應義塾大学院博士課程修了。専門は文化人類学。著書は『大文字の都市人類学的研究』(刀水書房)、編著『響きあうフィールド 躍動する世界』(刀水書房)、論文「テンペアとダンスカー-移動アフリカ人の放浪と定住の論理」『特集-隣りのアフリカ人-グローバル世界を生きる人びと:季刊民族学』176号



(左)写真1／梨泰院に働きに来た韓国人とアフリカ人が朝の挨拶をかわす
(右)写真2／酒脱のラスタファリア店前には、アフリカ人ばかりか多国籍が集まる



イスラームによるアフラシアの創生

梨泰院には、韓国最大のソウル中央モスクがある。周りを歩くと、スーダン人、南スーダン人、セネガル人に普通に出会う。ハラール認定店が並ぶ。インド人経営の店だが、インドネシア語でSelaamat Datang「ようこそ」と来客歓迎をうたう。どこも国籍が交叉する。ハラール・ステッカーを貼ったパン菓子店では、イラン人の店主とマリ人の客が「アメリカの暴挙」を語り合う。ヒジャブを買いに入った店の主人は、エジプト人だった。コーランを見ようとイスラーム書店とメッカ巡礼ツアーリスト店まで行くと、アフリカ人が歩いている光景に出くわす(写真4)。中央モスク門前では、スーダン人の経営学博士に出会った。梨泰院には、特記の必要なく普通に、アフリカがある。

中央モスクのすぐ傍、サウナホテル・イテウォンランドには、50人に1人位の割合でアフリカ人が入って来る。南スーダン人のハッサンに出会った。父デインカ人(南スーダ



写真3／在韓アフリカ人のシンボル・ハミルトンホテルでの宗教ミサ。憑依による救いが出現する



(右上)写真4／イスラーム街を歩くアフリカ人。梨泰院には、特記の必要がない混生がある
(右下)写真5／アフリカン・レストランが多い梨泰院。アジア-アフリカ交流が進む



混濁の地、韓国ソウル梨泰院(イテウォン)。国籍を溶き、民族を解く。元々、埠外や超過の地だ。暴力の極限、植民地日本軍の第20師団の射撃基地があったところである。解放後アメリカ政庁が引継ぎ、レストランや料理店、外国施設がここに展開、立地してきた。街人の力が、異物侵入を、新規の受容、混成へと換えてきた。その歴史的な結晶が、梨泰院である。それは、今もある。ハロウィーン放埒で、過剰がさらに超えて凝集し、14ヶ国26人の外国人も犠牲となった。梨泰院は、アジアとアフリカが出逢う、雑居混交の地である(写真1)。今も新規を結び、創造を続ける。

アフリカ生まれのキリスト教ミサが梨泰院で花ひらく

梨泰院は救いの地である。常軌はずれを掬い上げる。Club-Zionという名のナイトクラブ前では、エチオピア・ラスタファリアンとマレーシア・モスLEM女性が写真を撮り合っ

いた(写真2)。Avant Garde, New Halfという名のバーがある。日本語カタカナ看板にオカマクラブとある。LGBTQもしるし付きではない。梨泰院はあらゆるジェンダーを包摂する。「神に選ばれしカリスマ復興教会」The Lord's Chosen Charismatic Revival Churchの祈りの集会在開かれる。在韓アフリカ人のシンボル・梨泰院ハミルトンホテルにイボ人、ヨルバ人、カメルーン人、南ア人ばかりか、アフリカの霊力に心酔した韓国人も参集する。ゲスト・ホストの逆転が梨泰院に実る。

ラザルス牧師は謳いあげる。「HIV、麻薬、家庭崩壊」。「Crusade!, Crusade!」。力ある言葉が放たれ、歌い踊り交わる。「安寧を与えよう」マタイ伝11章28節が引かれる。交魂の力を深く受けた祈り人が昏倒する。苦しみからの解放、アフリカ性の再確認、逆にこのアフリカ人か韓国人か問わない共震の身体が、梨泰院に顕現する(写真3)。

ン)、母ヌバ人(スーダン)の系譜を持つハッサンは、母は商売でカナダに、父はイスラーム布教でブラジルに。南スーダン-スーダン-韓国-カナダ-ブラジルの生活網の中で家族が移動し合い暮らしている。異質や境界を軽々と超え続けるアフリカ人に梨泰院で出会う。ここは、やはり世界が出会いアフラシアが生まれる磁場なのである。

歴史的省察と贖罪、国際協力の再出発の地-梨泰院

「ベトナム戦争」における韓国軍先鋭部隊の「やりすぎ」を歴史的に反省する場所として、人びとは梨泰院を選んだ。この地は、暴力への自己省察とベトナムや東南アジア諸国への尊敬を届ける地である。梨泰院クイニョン通り、通称「ベトナム通り」と呼び、商店や街路の壁にベトナムの国土を表す地図を描いて敬意を表している。クイニョンは、通称African Roadへと繋がり、韓国料理店も商店店舗も多く、観光客をふくめ多くのアフリカ人が通る。韓越交流のプレートも建物の壁にはめ込まれている。

ここには、アフリカン・レストランHappy Homeがある。モスLEM・アフリカ人がハラール・マークが無くとも、アフリカ人として情

報を尋ねに来る。梨泰院でモスLEMとノン・モスLEMが交叉する。それは、サウナホテル・イテウォンランドでも同じだ。ハラールを謳うモスLEM用浴槽が一つあるが、混浴が基本である。南アのモスLEM・ズールー人とガーナ・キリスト教徒エウエ人などが、一つ浴槽で語り合う。韓国には、宗教ビザで入るアフリカ人も多い。ヨルバ母語でイボ語も話す友人アジベダは、宗教ビザで入った牧師見習いである。生活は苦しい。安価な大衆イボ料理を出すHappy Homeは、助かる。イボ人の経営だが、給仕はウガンダ人である。ザンビアからのネクタイ着用ビジネスマンも食べに来た。ここで、フルベ人在韓ナイジェリア大使にも出会うと交流した。梨泰院クイニョンは、人びとの階層差も帰属も超えて繋ぐ(写真5)。

コリアの結び、アフリカの創生、アフラシアへ

アフリカ人経営の服飾店も多い。アメリカ風若者ファッション、バスケット・モードを扱い、名古屋の大須商店街イボ人店主ヴィンセントも買い付けに来る。韓日アフリカが

梨泰院で繋がる。アフリカ料理店も多い。ナイジェリア人経営Bethel Restaurantには、英語圏アフリカのガーナ人、ケニア人がよくやってくる。ここで、英語で情報を交換し合う。テレビには、「ナイジェリア-北朝鮮」サッカーU19決勝戦の様子が映し出されていた。ナイジェリア人だけではない。英語圏アフリカ人たちも連れの韓国人も、視聴する。ガーナ人は「アフリカー」と叫び、韓国人は「コリアー」と叫ぶ。ナイジェリアに出稼ぎに行くガーナ人の鬱積も、板門店も、梨泰院が解く。韓国の地で「ガーナ-ナイジェリア」がアフリカに結ばれ、アフリカが「北朝鮮-韓国」を結びつける。梨泰院のチカラがある。

梨泰院は、いつでも逸脱と辺境をつつんで許容し、ベトナム民衆に謝罪と再友好を届け、コリアを結び、アフリカ植民地分割線を相対化する。そして、アジア-アフリカを繋ぎ溶解共同のアフラシアを創って、かならずある、普遍愛のグローブに向けて、自他双生のこの一步を今日もあゆみ進めている。

南スーダンで出会った「日本語」たち

文・写真／橋本栄莉

はしもと・えり／立教大学文学部准教授

一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了、博士（社会学）。専門は文化・社会人類学、宗教人類学。2009年より南スーダン、ウガンダでフィールドワークを行う。単著に『エ・クウォス：南スーダン、ヌエル社会における予言と受難の民族誌』（2018年、九州大学出版会）。

南スーダンの都市、村落を歩き回っていると、多くの日本語たちを目にする。

例えば車。南スーダンのみならず、アフリカには多くの中古車、トラック、バスなどが日本から輸出されている。地域自治体のワゴンや、昭和の香り漂う温泉宿のものと思しき専用バスなど、車体に印字された日本語から、私はその車の来し方を思う。楽しい黄色い幼稚園バスも、まさか南スーダンに来て訓練に向かう兵士たちの移動手段になるとは思わなかっただろう。大量の兵士を搭載した幼稚園バスというシュールな光景は写真に取めたかったが、兵士の撮影は命取りなのでやめておいた。

一方、なかには日本語かどうか怪しいものも存在する(写真1)。トラックには何やら「日本語風」の文字がペイントされている。先頭の文字は「(株)」のようにもみえる。

Made in Japanの持つブランド力から、「日本語風」に模倣された文字を見つける機会も多い。

首都ジュバに暮らす比較的裕福な家庭のカーテンには、花柄模様とともに「優先でおける」ということばが書かれていた(写真2)。家主は私を呼び、目を輝かせながら「この日本語はなんて書いてあるんだ、有名なブランドなのだろう？」と聞いた。何と答えたのか正確には思い出せないが、「私は知らないけど、「プライオリティ」と関わる良い意味だ」といった具合に言葉を濁した。それを聞いた家主は大変満足げだった。商品用サングラスのプレートに印字された「ああいウアガシグいが」(写真3)も有名な「日本ブランド」らしい。真実を知ってか知らずか、店主はそれを指さしながら、「ほら、日本のブランド物だから

買って行って」と食い下がった。

しかし、このような「日本語風」を見つけてなごんでばかりもいられない。南スーダンは、2011年に国家として独立したのちも大きな内戦を経験し、200万人を超える避難民が発生している。この内戦を支えているものの一つが、日本ブランドである。戦地の映像をみるたびに、日本車のブランド名とロゴが目に入り、私は心を痛める。もちろんこれらの車は避難民の移動にも役に立っているのだから、戦犯であるかのように呼ぶべきではないだろう。それでも、惨状とともに映し出される日本車をみるたび、これになかったならば、と思わずにはいられない。アフリカで氾濫する「日本語」たちは、人々のあこがれや期待、そして絶望を背負いながら今日も動いている。



写真1

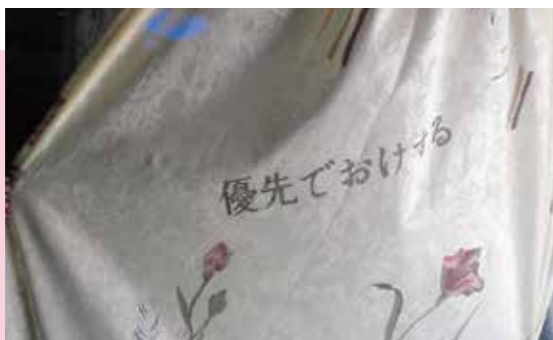


写真2



写真3

オセアニア史の語りにおける系譜と遺伝とその交錯

アジア地域研究所の主催で、上記の講演会を開催したので、以下その報告をしておく。

この講演は2021年の1月に実施予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大にともなって講師の来日が不可能となり、ずっと延期されていたものである。実は講演を開催した7月26日はまだ新型コロナウイルスの感染状況が十分落ち着いていなかったので、講演者のマット・マツダ(Matt Matsuda)氏の来日が可能となったので、急遽人数制限をして実施した次第である。

講演者のマット・マツダ氏はラトガース・ニュージャージー州立大学の教授であり、フランス史ならびに太平洋史が専門である。最近の著書に*The Memory of the Modern* (Oxford University Press, 1996), *Empire of Love: Histories of France and the Pacific* (同, 2005), *Pacific Worlds: A History of Seas, Peoples, and Cultures* (Cambridge University Press, 2012)などがある。

この講演会が可能になったのは、太平洋研究を行っているアジア地域研究所の特任研究員のトーマス・シュバルツ氏のおかげである。シュバルツ氏がマツダ氏と研究をともにしており、日本学術振興会の招聘制度を利用して、彼の来日が可能になったのである。

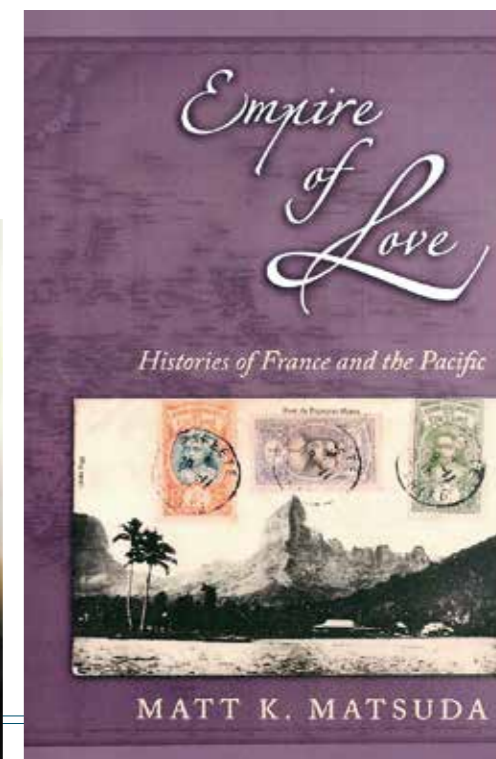
以下は講演内容の簡単な紹介であるが、文責はあくまでも報告者(豊田)にあることをあらかじめお断りしておく。マツダ氏の講演は様々な逸話に触れ、背景となる知識がないと十分に理解できない部分もあり、私が彼の講演の魅力を十分に伝えられるか、疑問を感じているからである。また[]の部分は、私が講演内容に説明を付け加えた部分である。これによって議論がわかりやすくなることを望んでいる。

マツダ氏はまずサモア出身の詩人、ウェント(A. Wendt)の詩の一節を紹介する。「私の中には死者が／骨のフルートが鳴らす音楽として肉に織り込まれている」。この詩の一節で示されるように、オセアニアの人々には、これまでの数多くの祖先の「系譜」が織り込まれている。そしてその「系譜」には太平洋戦争後の脱植民地化の動きが示されているという。

そしてもう1つ、オセアニアの歴史を語る際に影響を与えたのが、「遺伝」に関する研究の発達であるという。遺伝学の研究成果が、歴史研究に関する科学的な門戸を開いたのである。先住民の権利が問題とされる際に、DNAが先住民であるかどうかの基準になりうるような事態がオセアニア地域で生じている。オセアニアの歴史研



(左)写真1／マット・マツダ(Matt Matsuda)氏
(右)写真2／*Empire of Love: Histories of France and the Pacific* (Oxford University Press, 2005)



究においては、この2つ、すなわち「系譜」をもとにした語りと「遺伝」研究の成果による語り「交錯」してきたというのである。

この基本的な考え方をもとにして、マツダ氏の講演はいくつかの話題をオセアニアの歴史の一部として紹介してくれる。それぞれの話題にタイトルが付けられていたので、それらを「章」として内容の概略を紹介しておこう。

最初の章は「祖先の血」とタイトルが付けられ、近年の遺伝学の研究成果が、ハワイやニュージーランドにおいて、先住民の権利の条件を示す基準となりつつある状況が紹介される。いまや先住民であることを示すのに、DNA鑑定が問題になるのである[オセアニアの歴史を語る代表とされたウェント氏にドイツ人の祖先の血が流れていることは、オセアニアの人々の系譜の問題が単純ではないことを示してくれる]。

次の章「戦士」では、以上のような遺伝研究が進む一方で、今でも「系譜」が問題となる事例が紹介される。ニュージーランドでは、マオリ人には「戦士」としての「血」が流れていると言説が今でも語られる。そしてマオリ人コミュニティ

における犯罪率の高さの原因を、「戦士の血」にあるとする言説が、2000年代になってもまことやかに語られるという事件が起こったのである。今でもこのような語り一部とはいえ生じる状況が存在しているのである。

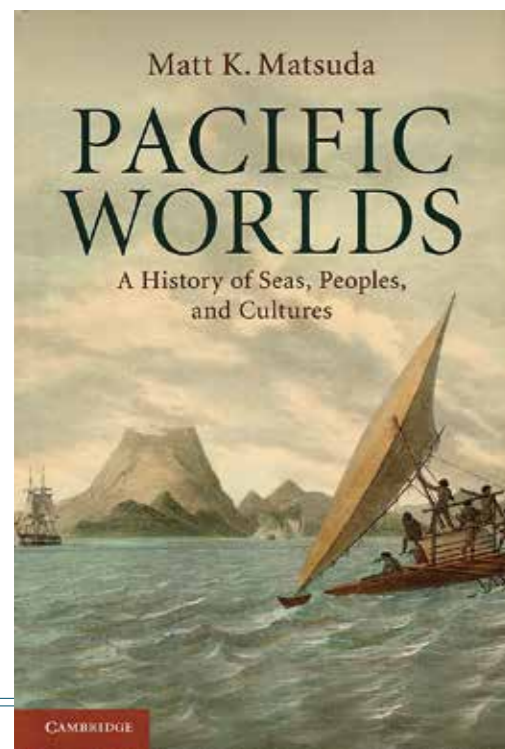
「古代の海洋民」の章では、オセアニアの人々が「海洋民」として語られてきた歴史が扱われる。太平洋諸島民の祖先はオーストロネシア語族として、そのルーツは台湾、中国南部にあるとされる[現在の太平洋諸島民は台湾、中国南部から、東南アジア島嶼部、ニューギニア島などのメラネシア地域を経て、太平洋のポリネシア地域に拡散していったというのが現在の通説である]。この通説をもとにして、ニュージーランドのコメディアンは、遠い祖先を求めて台湾を訪問し、自分たちのルーツをさぐったという話題が語られる。

「不滅の人間」の章では、遺伝学の研究が進むにつれ、特定の民族のDNA配列が特許になるのではないかと問題も生じている。パプアニューギニアの特定の民族が癌に対する耐性を持っているというのだが、これがその民族のDNA配

列によるのではないかと、だとすればそのDNA配列は特許権を申請できるものではないかという問題が生じているという。

講演ではこれ以外にも、「生命の木」、「盗まれた世代」、「盗難と贈与」、「生まれなかった子ども」などのタイトルとともに、この「遺伝」と「系譜」の問題が「交錯」してきたオセアニアの歴史が、数多くの逸話とともに語られた。

最初に、彼の講演は背景となる知識がないと十分に理解できないと私は言った。しかし、様々な逸話を豊かな画像とともに、理路整然とした口調で続ける彼の話は、背景となる知識が十分でなくとも、太平洋の歴史の語り、系譜の理解と、遺伝学の発展によって変遷してきたことを生き生きと伝えてくれる。そしてさらに背景となる知識が加われば、その説明がオセアニアの歴史の細部と関わることが理解でき、講演の醍醐味をより深く味わうことができるのである。私はこの一流の講演を聴きながら、少ない聴衆での実施に申し訳なきを感じるとともに、聴衆の中ではおそらく私が一番講演を楽しんだのではないかと、ささやかな後ろめたさも感じてしまったのである。



(左)写真3 / Pacific Worlds: A History of Seas, Peoples, and Cultures (Cambridge University Press, 2012)
(右)写真4 / 講演会の様子



石垣島へ渡った台湾人と台湾茶 —台湾総督府茶業伝習所の卒業生と石垣島の茶業

文・写真/今野純子

はじめに

沖縄に行ったことがある方は、他県で見かけない「さんぴん茶」という茶飲料を目にしたことがあるだろう。

「さんぴん茶」とは、ジャスミン(学名 *Jasminum sambac*)の花を薫花した「茶」のことを指す。

沖縄では、戦前からジャスミンの花の香りがする「茶」を常飲する習慣があったものの、大部分を中国や台湾からの輸移入で賄っていた。商品名は中国産の「清白茶」「香片」や台湾産の「包種茶」などだったが、全てジャスミンの花の香りがする「茶」であった。

沖縄は亜熱帯気候で立地的には茶樹の生育に適しており、戦前から製茶研究が行われていた。しかし、製茶には多額の資金が必要となるため、積極的に携わる県民が少なかった。しかも、「茶」は製茶技術の良し悪しが品質に大きな影響を及ぼす。製茶技術、すなわち製茶経験に乏しかった沖縄では、茶業が発展することはなかった。

一方、台湾総督府は世界商品としての台湾茶の存続をかけ、台湾人の茶業教育を行うために台湾総督府茶業伝習所(以下、茶業伝習所とする)を設立し、多くの人材を輩出した。その卒業生の中で唯一、石垣島へ渡り、茶業に従事した台湾人がいた。

そこで本稿では、茶業伝習所の指導内容を踏まえながら、石垣島に配属された第二期生の周金枝から、石垣島の茶業について考察してみたい。

1. 茶業伝習所の設置と茶業教育

1-1 茶業伝習所の設置

1930年1月21日、台湾総督府は訓令第8号「台湾総督府茶業伝習所規程」を公布し、茶業伝習所を設置、台湾人の茶業教育を開始した。

茶業伝習所は、台湾北部の台北州新莊郡林口庄に建設された。総面積65.36ヘクタールの広大な敷地のうち45ヘクタールは茶畑とし、烏龍茶や包種茶に適した青心烏龍種や青心大石(タイワン)種、インドから輸入した紅茶の優良種、アッサム種が植樹された。

1-2. 茶業伝習所の指導内容

茶業伝習所の講習期間は1年間、「真の茶業者の養成にあるを以て実習は特に重きを置く」と、実習を中心とした(写真1)。

所内には最新式の製茶機械が完備され、主力商品であった烏龍茶や包種茶のみならず、世界市場で主流となっていた紅茶についても製茶指導が行われた。中でも特筆すべきことは、製茶後の「茶」の品質を判定するための評茶を指導したことであった。

評茶とは、眼・舌・鼻及び触覚で出来上がった「茶」の品質の良し悪しを判断することを行う。「茶」の特性を熟知した上で、個人の主観や嗜好ではなく客観的に「茶」を評価する評茶は、高度な技術が要求される。各人の製茶技術の差によって品質が左右する「茶」の品質向上には、茶畑管理や製茶に加え、評茶の習得は必須であった。

1-3. 卒業生と進路

茶業伝習所が募集を行っていた1930年から1943年までの卒業生は、合計408名にのぼった²⁾。

茶業伝習所の入校時の条件には、公学校を卒業もしくは同等の学力があり、品行方正で身体強壯であること、また、入校前には国語

や算数の試験もあった。第一期生の募集時の状況を見ると、定員30名のところに435名もの応募者が殺到しており、入校生は10倍以上の倍率を突破した、いわばエリートであった。引く手あまただった卒業生は、茶業関連機関だけでなく、茶業とは関係のない役場や警察署などにも配属された(表1)。

その中で一人の卒業生が、遠く離れた石垣島へと渡った。

2. 石垣島の茶業概観

2-1. 石垣島における茶業の始まり

八重山諸島では1720年、茶種が持ち込まれたのをきっかけに、1732年、1743年と、茶樹の栽培や製茶を学ばせるために沖縄へ人を派遣し、製茶が開始された³⁾。こうして現在の石垣島東部に位置する於茂登岳一帯で出来上がった「茶」は、すべて八重山諸島内で消費された⁴⁾。

その後も石垣島では喫茶が定着していたが、「茶」の多くは移入に頼っていた。1927年、島内での茶樹栽培が奨励されたことを契機とし、石垣島で茶業が始まった。

同年10月、茶業組合が設立し、約3ヘクタールの茶畑を6年目に約240ヘクタール



写真1 / 茶業伝習所の教材(羅吉銓所蔵、2017年6月)

表1 / 茶業伝習所卒業生の卒業後進路比較

※単位：人

年度	自営	茶業技術員	製茶工場	役所	その他	計
第一期生	12	10	6	15	6	39
第二期生	14	4	6	1	5	30
第三期生	12	7	4	0	5	28
第四期生	11	4	5	0	6	26
第五期生	21	3	4	1	1	30
第六期生	15	0	12	0	1	28

*その他には、死亡者2名と不明を含む。
*出典：台湾総督府茶業伝習所編『台湾総督府茶業伝習所同窓会会報第2号』台湾総督府茶業伝習所、1937年、58-69頁より筆者作成。

表2 / 八重山産の茶の種類

※単位：斤

年度	八重山					沖縄県統計
	煎茶	番茶	紅茶	包種茶	計	
1931	3,725	4,313	-	287	8,325	23,981
1932	681	4,900	-	14,244	19,825	36,400
1933	1,656	1,562	-	12,106	15,324	34,488
1934	4,300	2,000	63	5,031	11,394	33,456
1935	-	-	-	12,281	12,281	36,850
1936	-	-	200	10,863	11,063	41,350
1937	-	-	188	8,650	8,838	46,406

*史料は貫での表記となっているが、斤換算とした。
*「包種茶」は史料上その他となっているが、花香した茶を指すため、便宜上、包種茶とした。
*出典：沖縄県編『沖縄県統計書』昭和4年から昭和12年より筆者作成。



(左)写真2 / 大同拓殖の碑 (中)写真3 / ガジュマル (右)写真4 / 茶畑の跡地



とする目標が掲げられた⁵。この時、嵩田の丘陵地帯を開墾したため、嵩田は「茶山」と呼ばれるようになった⁶。

翌1928年、釜炒り式で作られた日本風緑茶は、日本はおろか台湾よりも早く摘採ができたため「夙成(しゅくせい)」と命名された⁷。その後、製茶講習会や製茶機械の導入を行い品質向上が図られたが、市場で販売するまでには至らなかった。

2-2. 大坪亀吉と茶業の挫折

1929年、徳島出身の大坪亀吉が石垣島東部に位置する大浜村にて茶業を開始した。大坪は1920年、神戸の鈴木商店に入社、翌1921年、鈴木商店の八重山農場の主任として石垣島へ派遣されたが、1925年に退社、そのまま石垣島に定住した⁸。

大坪は1933年に茶園造成補助申請の許可を受けながら、1934年には、「清明茶」や「香片」のほか紅茶も製造販売した⁹。しかし、その後、暴風雨や季節風などの災害やマラリアに見舞われ、茶樹栽培を中断せざるを得なくなった。

3. 石垣島と台湾茶

3-1. 大同拓殖の設立

行き詰った茶業の打開策として台湾人の招致活動が行われ、1933年、台中州出身の曹清権らが石垣島に移住した。彼らは沖台公司を設立、茶業と共にキビ畑栽培の事業を開始したものの資金不足で行き詰まり、事業中止に追い込まれた¹⁰。その時、パイナップルを栽培したところ出来が良かったため、曹清権は謝元徳らを台湾から呼び寄せた。

当時、台湾ではパイナップルの需要高から、台湾人が経営する小規模工場が乱立していた。1930年、台湾総督府はパイナップルの工場設立を許可制としたため、次第に台湾人のパイナップル工場は淘汰された¹¹。台湾でのパイナップル事業の道を断たれた謝元徳らは、その新天地として石垣島に渡ったのであった。

1935年10月15日、沖台公司の事業を引き継ぎ、社長は謝元徳、常務に曹清権と林発、大坪亀吉らが取締役となり、大同拓殖株式会社(以下、大同拓殖とする)が設立された¹²。大同拓殖はパイナップル栽培事業を行う一方で、茶業の復興を開始した。そこで、製茶技術者として派遣されたのが茶業伝習所第二期生の周金枝であった。

3-2. 大同拓殖と茶業

周金枝が赴任した当初、茶樹は覆い茂った雑草に埋もれ、草原の中にわずかな茶樹が見えるようなほど荒廃していた。その後、大同拓殖が資金を投入し、茶園の除草や剪定を行い、次第に茶畑らしくなったという。大同拓殖は50ヘクタール余りの茶畑を有し、茶樹の多くは2、3年前に台湾から移植した大葉烏龍種、青心大冇種、ほかに日本品種があった。

建坪50坪ほどの工場内には、烏龍茶を作るための釜炒り機械、攪拌機や乾燥機、揉捻機のほかに紅茶専用の製茶機械が設置され、播種まもなかった台湾品種ではなく、日本品種で烏龍茶と紅茶を製造した。

周金枝は、茶業伝習所があった台湾北部に比べ気温が高く、製茶期間中の降雨量も

少なかった石垣島の気候を踏まえ、烏龍茶の香りを形成する萎凋や攪拌の時間や回数を調整し、異臭や生臭さを改善することに成功した¹³。その結果、出来上がった烏龍茶は台中方面で販売し、好評を得ることとなった。

3-3. 石垣島と包種茶

沖縄本島と同様、ここ石垣島でも「茶」は必需品であり、中でも、安価でジャスミンの花の香がする「茶」を嗜好していた。

1936年に石垣島を訪問した静岡県茶業組合連合会議所の長曾我部格によると、1934年頃、石垣島には約2ヘクタールのジャスミンが植樹されていた。しかし、病害や潮風による塩害の影響を受け、約1ヘクタールまで減少したようであった¹⁴。

その後、周金枝らはジャスミンへの影響が大きかった塩害を防止するために、台湾の相思樹(学名*Acacia confusa* Marr)を防風林として完備するなどの対策を講じたものの、病害が多発し、1937年頃にはジャスミンの栽培面積は約0.5ヘクタールまで減少した。

こうした困難の中でもジャスミンを栽培し続けた結果、1937年の沖縄県における香花作物の全収量570斤のうち450斤が石垣島で作られた。収穫されたジャスミンの花は、島内で製茶した茶葉5斤につき1斤の割合で薫花し、島内で販売された¹⁵。

3-4. 石垣島と紅茶

一方、表2のように、石垣島では1936年と1937年、200斤あまりの紅茶が製造され

た。そもそも大同拓殖は紅茶を主力商品として予定しており、茶業伝習所の卒業生を招聘していた。周金枝が石垣島へ渡った翌年から紅茶が軌道に乗ったことは、彼が茶業伝習所で習得した最新の紅茶製造技術を遺憾なく発揮した結果と言えるであろう。

1937年、周金枝は台北で開催された同窓会に出席した。その席で、周金枝は「当地(石垣島。筆者注)に転住し茶業開拓に突進して居ります」と述べたように、製茶技術者として、大同拓殖の茶業、ひいては石垣島の茶業を支えたのであった。

おわりに

2022年2月の終わり。新型コロナウイルス(COVID-19)まん延防止等重点措置が解除されたばかりの石垣島を訪問した。ここ石垣島に配属された周金枝が、どのような場所で製茶をしたのかを見るためであった。

タクシーをチャーターし、島の中西部に位置する嵩田に向かった。嵩田の集落に到着後、運転手さんと共に付近にある住居を探し、聞き取りを開始した。4、5軒を訪ねたとき、付近に戦後、大同拓殖の土地を購入した人がいることを告げられた。「今年はサトウキビの収穫が遅れているから、今日は家にいるかもしれない」という、有力情報も掴むことができた。足早にその家を訪ねてみると、70代半ばの老人が、開け放たれた事務所の中に座っていた。

事務所の前には、「大同拓殖」の碑があった。この碑は2012年8月、戦前、石垣島に渡りパイナップル産業と水牛を導入し、八重山の産業に寄与した台湾人に対する感謝の気

持ちを込めて建てられた「台湾農業者入植顕彰碑」の関連事業として、同年9月に設置された¹⁶。碑のすぐ裏には太いガジュマルがあり、根っこの下には戦中に使用された防空壕があった、と教えられた。

次に、当時、茶畑があった場所に案内された。土壌は周金枝が報告したように、茶樹の生育に適した砂質の赤土であった。現在の持ち主であるその老人は、沖縄県大宜味村から1957年に石垣島にわたり、1959年からここに住んでいるという。当初は、茶樹が足の踏み場もないほどに生い茂っていたものの、茶樹を一本一本引き抜き、荒廃した茶畑を更地にし、パイナップルとサトウキビを植え、生計を立てたということであった。

現在、茶畑があった場所には、見渡す限りサトウキビ畑があるだけで、一本の茶樹さえない。あるのは、当時の工場の基礎部分と井戸、そして、「大同拓殖」の「日本パイナップル産業発祥の地」という碑だけである。そこには、大同拓殖と茶業について、石垣島に茶樹があり、台湾人によって製茶が行われていたという事実は記されていない(写真2〜4)。

本稿を通して、戦前、石垣島に茶畑があり台湾茶が作られたこと、それには製茶技術を持った台湾人が渡り住み、石垣島の茶業発展を願い、過酷な状況下でも懸命に製茶を行ったということが参考になれば幸いである。

<参考文献>

- 1)台湾総督府茶業伝習所『台湾総督府茶業伝習所概要』台湾総督府茶業伝習所、1938年、頁不明。
- 2)台湾省政府農林庁編『茶業伝習所工作年報第2号』茶業伝習所、1958年6月、11頁。
- 3)得能壽美「近世八重山における諸品の島産化—塩・唐竹・紙・茶・煙草—」『沖縄文化第43巻第2号

- 106)沖縄文化協会、2009年12月、11頁。
- 4)沖縄茶業誌編集委員会編『設立20周年記念沖縄茶業誌』沖縄県茶生産協議会、1995年、166頁。
- 5)「茶業組合愈々成立」『八重山新報』1927年10月25日。
- 6)国永美智子ほか編著『石垣島で台湾を歩く：もうひとつの沖縄ガイド：八重山発の地域教材』沖縄タイムス社、2012年、63頁。
- 7)「嵩田園の「夙成」「万歳」茶業組合の製茶」『先島朝日新聞』1928年8月20日。
- 8)沖縄朝日新聞社編『沖縄県人事録』沖縄朝日新聞社、1937年、71頁。
- 9)「大坪製茶工場を観る」『八重山民報』1934年7月11日。
- 10)入嵩西正治編『八重山糖業史』石垣島製糖、1993年、152頁。
- 11)廣本由香「パイナップルの両義性—台湾移民二世のライフヒストリー—」『資源』の「地域化」『多層性とダイナミズム：沖縄・石垣島の社会学』東信堂、2018年、31-32頁。
- 12)林発『沖縄パイナップル産業史』沖縄パイナップル産業史刊行会、1984年、20頁。
- 13)台湾総督府茶業伝習所編『台湾総督府茶業伝習所同窓会会報第2号』台湾総督府茶業伝習所、1937年、24-25頁。
- 14)「九州、沖縄、台湾茶業視察記(四)」『茶業界第32巻第3号』静岡県茶業組合連合会議所、1937年3月、31頁。
- 15)内村進「沖縄県の茶業」『台湾之茶業第21巻第1号』1938年5月、46頁。
- 16)松田良孝「沖縄県の台湾系住民をめぐる記憶の連続・断裂・散在—宮古地方と八重山地方を比較して—」『白山人類学研究会』『白山人類学研究会第21号』2018年3月、17-20頁。

今野純子(こんの じゅんこ)

立教大学アジア地域研究所特任研究員
専門は近代アジア茶業史。中央大学文学部史学科卒業後、損害保険会社に入社。中国茶&台湾茶に魅せられて、退社後の2010年、東京で中国茶&台湾茶教室を開業。毎年90日ほど中国と台湾各地の茶農家を訪ね、製茶に携わる中、2014年、中華人民共和国認定高級評茶師を取得。2022年3月、立教大学大学院にて博士号取得。

今帰仁城出土銅印をめぐって

石黒ひさ子・王麗

まず、**図1**を見て欲しい。これは沖縄県今帰仁城で出土した銅印である。続いて**図2**は、中国江蘇省にある常熟博物館所蔵の銅印である。図1と図2の印を重ねたものが**図3**である。**図1**と**図2**を観察すると印面の四隅の模様には違いがあるが、中心の文字状の部分は点や横線がびたりと重なる。この一致は二つの印が同じ型から作られた同範印であることを示す。沖縄と中国、東アジアの海域の二つに地域に同じ印が存在していたのである。これは驚くべきことではないだろうか。

四日市康博氏を代表とする科研プロジェクト「海域アジアにおける港市および港市国家の基礎的研究：広域的・多角的な視座から」では、2022年6月に沖縄のグスクを踏査するというフィールドワークを実施した。その際に筆者が今帰仁城で実見したのが**図1**の印である。今帰仁城は世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として登録されたグスクの一つで、13世紀後半の山北(北山)王時代に築城され、1609年の薩摩入りによって廃城となった城跡である。**図1**の印は今帰仁城志慶真門郭第三区の発掘で出土した銅印で、大きさは縦2.0×横1.9センチメートル、鈕は先端が欠損するが、高さ0.8センチメートルが残存し、印面の円の直径は1.8センチメートルである。印面に刻まれたのは花押で、これは中国の宋代(960-1279年)から元代(1279-1368年)によく見られるタイプの花押である。考古学

発掘から推測される志慶真門郭の使用時期は14世紀から16世紀であり、花押印が中国で流行した時期と合わせて考えると、この印は14世紀頃のものと考え得る。

今帰仁城からはもう一点、**図4**の銅印も出土している。銀錠と似た形であることから、この形の印は錠印と呼ばれる。この印は今帰仁城外郭の第5次調査で出土したもので、長軸2.3センチメートル、短軸0.8センチメートル、高さ0.6センチメートルである。印文は不鮮明であるが、下の部分は宋代から元代に見られる花押に類似する。この印はⅦ区のⅡa層から出土している。Ⅱa層からは15世紀後半から16世紀の遺物が出土しているが、その下層には13世紀後半から15世紀の遺物が存在する。この錠印にも花押があることから、**図1**の志慶真門郭出土印と同じく14世紀頃のものと考えられる。

図2の常熟博物館蔵印は伝世品である。常熟博物館所蔵の古印コレクションは常熟の鉄琴銅劍樓収蔵の印を基礎としている。常熟の鉄琴銅劍樓は清代の四大蔵書樓、瞿紹基(1772-1836)に始まる蔵書コレクションは、現在では中国国家図書館等に寄贈されている。第二代瞿鏞(1794-1846)は書籍の他に金石も収集し、蔵書と金石を収蔵する建物をそのコレクションの鉄琴と銅劍から「鉄琴銅劍樓」と名付けた。瞿鏞は収集した古印を道光年間(1820-1850)に鈐印本『集古印譜』として公刊し、咸豊八年



図4/今帰仁城外郭出土銅印
(写真:著者撮影・資料は沖縄県今帰仁村歴史文化センター所蔵、図:沖縄県今帰仁村歴史文化センター展示解説シート4出土した印章(2010年3月・2刷2012年3月)掲載図)



図5/新安沈船出土印・南海1号出土印
①国家文物局水下文化遺産保護中心・広東省文物考古研究所・中国文化遺産研究院・広東省博物館・広東海上絲綢之路博物館編『南海1号沈船考古報告之二二〇一四~二〇一五年発掘』文物出版社、2018年、第540頁図8-73
②国家文物局水下文化遺産保護中心・広東省文物考古研究所・中国文化遺産研究院・広東省博物館・広東海上絲綢之路博物館編『南海1号沈船考古報告之二二〇一四~二〇一五年発掘』文物出版社、2018年、第540頁図8-74
③国家文物局水下文化遺産保護中心・広東省文物考古研究所・中国文化遺産研究院・広東省博物館・広東海上絲綢之路博物館編『南海1号沈船考古報告之二二〇一四~二〇一五年発掘』文物出版社、2018年、第540頁図8-75
④韓国国立中央博物館所蔵品で、韓国の公共NURI第1類型で公開された「용무늬를 새긴 나무 인장 木製龍紋印章」を利用。https://naver.me/5s9cAnbC, 신안23906.
⑤韓国国立中央博物館所蔵品で、韓国の公共NURI第1類型で公開された「목 도장骨印鑑」を利用。https://naver.me/5s9cAnbC, 신안23693.

(1858)にはこれを底本とした版本『鉄琴銅劍樓集古印譜』が刊行された。1937年に日中戦争が始まると、鉄琴銅劍樓所蔵の古印は瞿氏第四代の瞿啓甲(1873-1939)により鉄琴銅劍樓の庭に埋匿された。鉄琴銅劍樓は日本軍による常熟攻撃時に大きな被害を被っているが、1976年に瞿啓甲の子である瞿旭初(1905-1980)が埋蔵場所を探しだし、564点に及ぶ古印を常熟市に寄贈した。**図2**の印は『鉄琴銅劍樓集古印譜』にもあり、道光年間には瞿鏞のコレクションに入っていたものである。『常熟博物館蔵印集』(人民美術出版社、1997年)、『鉄琴銅劍樓蔵印集』(廣陵書社、2013年)に見える印面は、縦2.0×横1.9センチメートル、印面の円の直径は1.8センチメートルと今帰仁城志慶真門郭出土印と同じ大きさで、**図3**で確認できるように同範印である。

中国の印文化は古くから存在するが、古印の収集や研究の中心は官印が主となっている。官印に対して、個人として使用する印は私印であり、**図1**のような花押印も私印の一種とされる。花押印は、周密(1232-1298)が南宋滅亡(1279)後に書いた『癸辛雜識』の別集に宋代歴代皇帝玉押印の記載があること、また元末明初、14世紀半ばから15世紀の文人である陶宗儀の随筆集『南村輟耕録』(至正二六年(1366)序)には、蒙古色目人は花押を書くことができないので、象牙や木製の印を用いている、とあることから、宋元代、10~14世紀頃に流行したと考えられている。花押印は実際には宋元時期に広く用いられたと思われるが、至元六年(1269)に制定されたパスパ文字と花押を組

み合わせた印もあり、古印収集の世界ではこのタイプの花押印を「元押」と呼んでいる。元押には文字の他に画像印や、パスパ文字・漢字で「記」字を持つ印、「合同」や「封」、また吉祥語を示す印、宗教のシンボルを示す印等も含まれる。また方形だけでなく円形、錠形など形状も様々である。

考古学的に発掘された元押は極めて少ない。広東沖で発見された南宋時期、12世紀後半の沈没船南海1号からは漢字と花押が組み合わされた木製印が出土し(**図5**①・②・③)、元代の沈没船で韓国西南の海中より発掘された新安沈船では木製と骨製の印(**図5**④・⑤)が発見されている。内蒙古自治区の黒水城(カラ・ホト)遺跡出土の元代文書には花押印が実際に押印されている(**図6**)。伝世品のコレクション等の元押には銅印が多く見られるが、今帰仁城の二つの印のように具体的な発掘状況のわかっている銅印は、中国ではほとんど見られない。

一方で日本では、元押に相当する銅印が福岡県博多遺跡群でも発見されている。博多遺跡群第64次調査では文字のある約1.8センチメートル四方の銅印が出土した(**図7**①)。この文字はパスパ文字風の雰囲気はあるがパスパ文字としては釈読できず、「記」か「印」または「合(同)」等の文字が篆書風に記されたものかもしれない。また博多遺跡群第78次調査ではパスパ字指輪銅印が出土している(**図7**②)。これは直径2.8センチメートルの指輪で、パスパ文字で「記」が記されているが、文字が正字で、押印すると逆字になる。第64次調査で銅印が出土したのは15~16世紀の層であるが、その下には13世紀後半~



(左) 図1/今帰仁城志慶真門郭出土銅印(写真:著者撮影・資料は沖縄県今帰仁村歴史文化センター所蔵、図:沖縄県今帰仁村歴史文化センター展示解説シート4出土した印章(2010年3月・2刷2012年3月)掲載図)
(中) 図2/常熟博物館蔵花押印(写真:常熟博物館所蔵、図:銭凌・呉慧愚編『常熟博物館蔵印集』人民美術出版社(1997年9月))
(右) 図3/今帰仁城志慶真門郭出土印と常熟博物館蔵銅印(出典:沖縄県今帰仁村歴史文化センター展示解説シート4出土した印章(2010年3月・2刷2012年3月)掲載図と銭凌・呉慧愚編『常熟博物館蔵印集』人民美術出版社(1997年9月)、第62頁図を合成して作成)



図6／黒水城出土漢文文書(至正二十四年(1364)整點站赤文書)
(塔拉・杜建録・高國祥主編『中國藏黑水城漢文文獻』 国家図書館出版社(2008年)、
第五卷第1157頁、MM1-0932[F116:W396]至正二十四年整點站赤文書(5-5))

私印押記集存』や、「元の花押印は大量生産され、様々な場所や人に販売された」(黄惇『元代押印研究』『元代印風』重慶出版集團重慶出版社、2011年)という意見が示されている。五点もの同範印が存在する図8の事例は錠印であり、同じく錠印である今帰仁城外郭出土印にも同範印が残されているかもしれない。

今帰仁城志慶真門郭出土銅印は考古学的に発掘されたものであり、常熟博物館所蔵銅印は瞿鏞が道光年間までに入手している。19世紀の道光年間に今帰仁城で後に出土する予定の銅印のコピーを作ることは不可能であり、二つの印は14世紀頃と推定される作成時に同範で作られ、一つが琉球に渡ったのである。ここから同範印には遠距離での保証という用途も考えられ、同範の花押印を一概に大量生産された既製品と見ることは再考が必要である。

遠距離での保証とは、今帰仁城のある琉球と中国の間に保証の必要があったことを意味する。日本と中国の間を移動するルートには、博多から中国の舟山列島を経由して寧波に入る大洋路と、九州を南下し、南西諸島を経由して中国福建省東岸に至る南島路が存在するが、南島路に関わる南西諸島では13世紀後半以降に中国産陶磁器の流通状況が変化し、この時期には福建省閩江流域で生産された白磁、今帰仁タイプと呼ばれる連江県浦口窯製品や、ピロースクタイプと呼ばれる閩清県閩清窯製品が琉球列島で大量に出土するようになることが考古学的に確認されている。これは中国福建地域と琉球列島を直接結

14世紀の層があり、今帰仁城外郭の銅印出土状況とも類似している。第78次調査の指輪印は14世紀前半の層から出土したものである。

元押は、パスパ文字が書かれていれば1269年以降の印と見なせるが、それ以外には明確な時期区分の基準は無い。また多くの元押は伝世品であるが、その真贋にも不明点が多い。考古学的に発掘されたという点でも今帰仁城志慶真門郭出土銅印は貴重なのであるが、これが常熟博物館蔵銅印と同範印ということが判明したことで、この二つの印の重要性は更に大きくなったのである。

伝世の元押に同範印が存在することは、実は以前から知られていた。『唐宋元私印押記集存』(上海書店出版社、2001年)所載の元押にはかなりの数の同範印が確認でき、最多では一つの印面に対して五点の同範印が見える(図8①～⑤)。このような同範印について「これは私印の作坊で既製品が作られていて、既製品は商品化されたものであり、元代私印の社会活用の規模が反映されている。」(孫慰祖『唐宋私印押記初論』『唐宋元

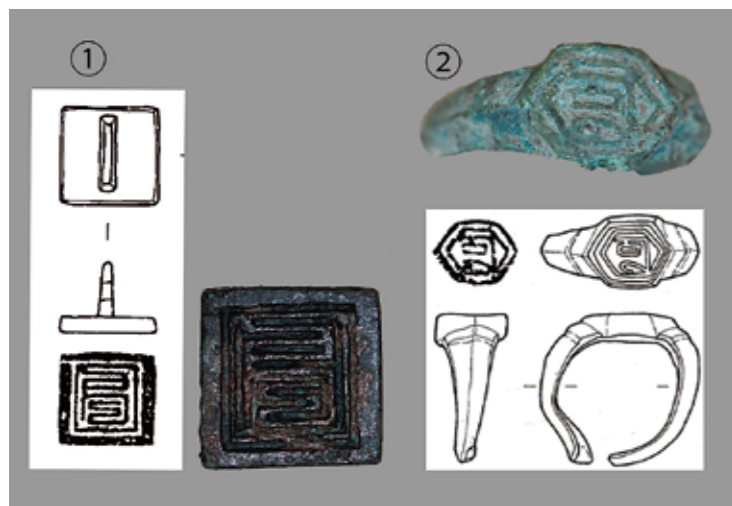


図7／博多遺跡群出土印
①写真：著者撮影、資料は福岡市埋蔵文化財センター所蔵、図：『博多24 博多遺跡群第64次調査報告』福岡市埋蔵文化財報告書第252集 福岡市教育委員会(1991年3月)、第40頁第27図1
②図：『博多44 博多遺跡群第78次調査報告』福岡市埋蔵文化財報告書第252集 福岡市教育委員会(1995年3月)、第37頁fig.72-1

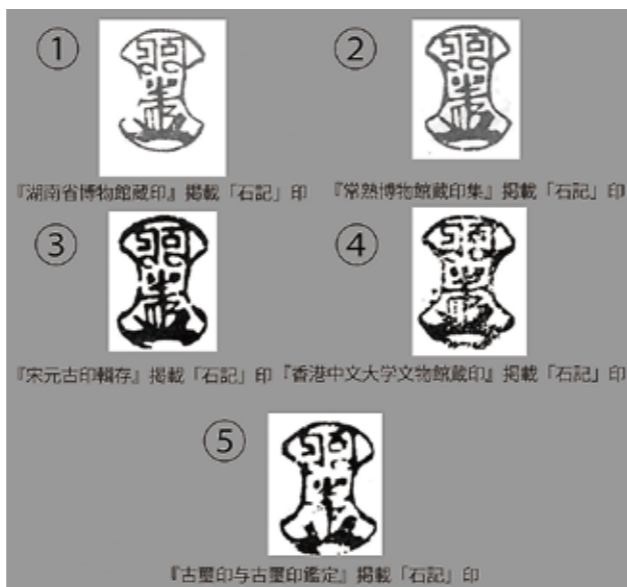


図8／同範印(孫慰祖『唐宋元私印押記集存』上海書店出版社(2001年))
①第339頁図2263、②第339頁図2264、③第340頁図2272、
④第340頁 図2273、⑤第340頁図2274



関連地図(Google earthを利用して著者が作成)



今帰仁城志慶真門郭(著者撮影)

ぶ交易ルートが存在していたことを示すものである。

山内晋次氏は、琉球の三山王権から明朝への進貢は14世紀後半に開始時からトン単位での硫黄が送られていること、上記のように13世紀後半には福建と琉球の交易が機能していたことから、13世紀後半から14世紀前半に沖縄地域から中国への硫黄輸出が始まっていた可能性を示している(山内晋次『日宋・日元貿易期における「南島路」と硫黄交易』『国立歴史民俗博物館研究報告』第223集、2021年)。琉球列島で硫黄を産出するのは硫黄島であり、沖縄本島の大型グスクで硫黄島へ最も近いのが今帰仁城である。今帰仁城は三山が並立した琉球王国形成時期の山北(北山)国の拠点であり、その後は中山によって統一された王国時期には中山国監守が派遣されている本島中部の拠点となっていて、北には大型船の利用も可能な運天港が存在する。

13世紀後半に福建沿岸地域から琉球列島への交易ルートが形成され、それにより大量の中国産陶磁器が琉球列島に流入するようになる。今帰仁城出土の銅印も、このルートによって中国からもたらされたものと考え得る。元押は私印であり、押印によって私人としての信用行為を保証するのであれば、その対象として考えられるのは商業的な保証である。上述の山内氏の指摘にあるように、琉球は硫黄の輸出が可能である。硫黄を輸出するには梱包が必要であり、梱包時に商品価値のない石や砂を詰めるという不正を行うことも可能であるから、外装のみで硫黄の存在を確認するには取扱者による保証が必要である。今帰仁城出土の銅印はこの検品印として使われた可能性が指摘できる。

硫黄を琉球で入手し中国へ輸出するには、遠距離交易が可能で商業集団の存在が想定される。そのような集団での銅印の使用方法については文字資料にも考古学資料にも具体的

なものはないが、想像を巡らせてみたい。商人集団は中国で複数の同範銅印を用意し、一つを琉球へ向かう仲間の一人へ託す。照合のために中国にも同範印を残しておく。銅印を託された琉球での取引の責任者は、硫黄の梱包を確認し押印する。押印場所には梱包材、封緘時の封蠟、荷札等が考えられ、押印方法にも商業集団内での取り決めがあったであろう。内容物が硫黄である保証があれば、不正による損益を防ぐことができ、また中国到着後、輸入港、流通ルートでもそれぞれの拠点に同じ印を置いておけば、貨物の照合と品質保証をより容易に、確実に行うことができたはずである。同範印の使用と商品としての硫黄の特徴を考えると、以上のような想定もまた可能ではなさそうだろうか。今帰仁城で出土した二点の銅印に類似する印が出土している博多遺跡群では、中世の港の護岸と考えられる石積み遺構が確認された第221次調査で硫黄が発見され、博多から硫黄が輸出されていたことが実物資料によって証明されている。

海外への交易、また貿易での押印を直接裏付ける資料はないが、商品に押印したという事例には、福州で発見された淳祐三(1243)年に死去した黄昇墓出土の絹製品がある。図版等は公開されていないが、この絹製品には「宗正紡染金糸絹官記」の墨書と「趙記」と釈読される押印があり、墓誌の情報等と合わせて、この墨書と押印は泉州の南外宗正司直属の工廠での製作を証明するものとも考えられている(『福州南宋黄昇墓』文物出版社、1982年)。

今帰仁城志慶真門郭から出土した銅印は14世紀、琉球からの中国への輸出品の保証と管理を示すものと推定される。これは科研プロジェクト「海域アジアにおける港市および港市国家の基礎的研究：広域的・多角的な視座から」で目指す「港市国家」と人・モノ・文化の流通の関係の具体例となる発見であり、今後更に検討を深めていきたい。

Profile

石黒ひさ子(いしぐろ・ひさこ)／明治大学政治経済学部兼任講師、明治大学日本古代学研究所客員研究員、岩手大学平泉文化研究センター客員准教授 1998年明治大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学、修士(史学)。専門は中国史、墨書陶磁器の資料集成と史料化への研究を行っている。
王麗(Wang Li)／江蘇師範大学中華文化研究院副研究員 2021年神奈川大学大学院歴史民俗資料学専攻博士課程修了、博士(歴史民俗資料学)。

インドネシアとつながる 国内の体験学習とオンライン講座をとおして

工藤 正子

立教大学
観光学部教授

観光学部の「グローバル・スタディ・プログラム1: 言語の習得と生活体験」の「インドネシア・コース」を今年度(2022年度)担当しています。本授業は、海外協定校との短期交流プログラムと事前、事後学習から成り立つ通年科目です。協定校との交流は新型コロナウイルス感染症拡大のためオンラインとなりましたが、これまでの授業の様子をお伝えできればと思います。

わたし自身は、日本や海外に住むイスラム教徒(以下「ムスリム」)、とくにパキスタン人男性と日本人女性の夫婦が作る家族を対象に、国境を越えた家族や宗教的アイデンティティの形成について研究してきました。本授業では幸いにもインドネシア研究の第一線で活躍する5人の先生方をゲストスピーカーにお招きすることができ、近現代史、食や衣、宗教と政治などに関する魅力的な講義が展開されました。12月にはバリ島のエコツーリズムについてのゲスト講義を予定しています。

また、在日インドネシア人学生や、アラブ首長国連邦育ちの日本人ムスリムの方を教室にお招きしました。同世代の若者との交流をとおして、受講生たちは「ムスリム」といっても、ヒジャーブ(女性のスカーフ)やハラール食への態度や実践は多様であることを学び、自分のなかの固定概念に気づききっかけともなったようです。

そのほか、春学期には体験学習として東京都内にある東京ジャーミイ(写真1、2)を訪れました。土曜日だったため、多くのムスリムが礼拝に訪れていました。ガイドをしてくださった下山茂さんによると、コロナ禍前までは、日本在住のムスリムだけでなく、インドネシアやマ

レーシアから新興中間層の観光客や、私立高校の修学旅行の生徒たちが礼拝に訪れるようになっていたそうです。受講生たちは、礼拝の場やハラール食品店やカフェなども見学し、観光学部の学生として、ムスリムの観光客への配慮やイスラミック・ツーリズムについて現場で学ぶ貴重な機会となりました。また、礼拝を見学させて頂いた感想としてある学生は、「礼拝の風景ってもっと厳かなものだと思っていたら、子どもたちが大人が礼拝しているそばで遊んでいて、自分が小さいときの法事なんかのときもそうだったなあって思い出しました」と語ってくれました。このように、体験学習は、異質なものとして捉えていたイスラムを自分の身近な生活や記憶と結びつけるきっかけともなったようです。

8月には、インドネシア大学のオンライン夏期講座が本授業の受講生のために提供されました。観光学部は同大学の人文学部と協定を結んでおり、これまでも学生と教員がインドネシアを訪問し、交流しています。今回実現したオンライン・プログラム(5日間)では、インドネシア語講座や、

インドネシア社会や文化についての講義(英語)が行われ、食の多様性や、映画とジェンダー、音楽、インドネシアの韓流ブームなど多彩なトピックが取り上げられました。その後、学修内容を発展させたグループ・プレゼンテーションやヴァーチャル・ツアーも行われ、インドネシア大学の学生とも交流を深めました。学生たちは、プログラムをとおして英語で意見交換することに自信がついたようです。また、『「文化の融合』といわれても日本で生活しているとイメージがわきにくい、インドネシアではダイナミックな文化の融合が生じていることが授業でだされた具体例からよくわかった』という声もありました。コロナ禍のためオンラインであったことは残念でしたが、学生それぞれがモニター越しに刺激を得、異文化や自分の文化に対する見方が大きく変化したようです。

秋学期後半に入った11月現在では、最終レポートの完成を目標に各自が問いを立て、リサーチを進めています。それぞれの関心を発展させ、インドネシアに対する理解を深めていくことを期待しています。



写真1/イスラム文様が施された礼拝堂の天井(東京ジャーミイ)



写真2/東京ジャーミイの外観について説明を受ける学生たち

Book review

— アジ研の本棚 —

評/大橋健一(立教大学観光学部交流文化学科教授・アジア地域研究所員)

香港と「中国化」 — 受容・摩擦・抵抗の構造

編著者/倉田徹・小栗宏太

発行/明石書店(2022)

価格/4,500円(税別)



25

香港における2014年の「雨伞運動」、そしてその後の2019年の「逃亡犯条例」改正問題に端を発した大規模な抗議デモは、それぞれ当時、日本でも連日大きく報道され、激動する香港の状況に1997年の「香港返還」以来多くの注目が集まった。しかし、その注目は2019年に発生した新型コロナウイルス感染症とその世界的流行、そして、その取束も依然ままならない状況の中、2022年に始まったロシアによるウクライナ侵攻によっていつしか人々の注目・関心の彼方に追いやられてしまった感がある。しかし、2014年以降の香港の「危機」がそれで過ぎ去ったというわけではもちろんない。

このような中であって、香港をめぐる「危機」的状況の社会的背景をそこに生き、暮らす人々の目線、とりわけ「街頭」という香港をめぐるトポスに立脚し、香港という社会の歴史的な文脈への目配りを重視しながら多面的・多角的に論じた貴重な論集として刊行されたのが本書である。このような本書の立ち位置は、「香港国家安全維持法」の導入によって香港の「中国化」が憂慮され、その「危機」が叫ばれる今日、「そのような状況下であってこそ、香港の来し方を正しく、多角的に、冷静に検証することは、その行く末を考える上で欠かせない作業である」(本書14頁)とし、「香港が今後どんな道を辿ろうとも、そこに暮らす人々の生活は続くということ」(本書351頁)を踏まえた上で、「変化の先を見つめ続けることこそが、今日の香港を憂う者に求められる態度」(本書351頁)とする本書の編者たち

の言葉に明確に表されている。

全二部・14章から構成される本書では、「中港関係」を主とする香港をめぐる「関係」を扱う第一部と、その「関係」の中で展開されてきた相互の受容・摩擦・抵抗の構造を香港の人々の「価値観」の変遷として扱う第二部とが、政治・政策、経済、法はもとより、市民社会、ポピュラー音楽・芸能、アイデンティティ・社会意識、宗教、開発・ローカリズム、感情、映画、医療・衛生、露天商、と実に多様で具体的な切り口から香港社会の動態を論じている。

「街頭」こそが都市香港の本質であるとの直感/直観に衝き動かされて1980年代の後半、返還前の都市香港に数年間滞在した評者は、本書が21世紀現代香港のきわめてアクチュアルな政治社会的「危機」を重要な契機とし、その最前線を注視しながら、一方でそれを都市香港の本質としてのトポス＝「街頭」に立脚しながら、単なる時事的話題としての香港の「危機」を超えたところで香港社会の本質に迫ろうとアプローチしている点に大いに関心を寄せた。このようなアプローチのおかげで、すでに「歴史」と化してしまっていた1980年代後半の香港経験しか持たない評者がかつて関心を寄せた都市香港の「街頭」現象の数々が、現代の香港社会の「危機」と断絶することなく、実は深く通底する重要な意味を持つことに気付かされた。

ここでの「街頭」とは、単に物理的空間としての路上空間のみを意味するものではない。むしろ香港においてはこの路上

に展開する「街頭」空間それ自体が極めて刺激に富むことは言うまでもない。都市香港は、まさにそのような刺激的な「街頭」風景によって強くイメージ付けられてきたと言っても過言ではない。しかし、そのような「街頭」のありようは、単なるビジュアルイメージを超えて、何よりも「街頭」が香港社会における「公」と「私」がせめぎ合う境界領域としての重要な社会空間として長らく成立してきたことを物語っている。2014年の「雨伞運動」、そして2019年の民主化要求デモにおいても若者を中心とした多くの市民によって「街頭」の占拠が展開したことは、その意味においてきわめて象徴的な出来事であったが、しかしその意味を政治運動の単なる戦術として一般化して理解すべきではない。香港社会の本質としての「街頭」こそが、まさにその「危機」に際してもまた舞台とならざるをえなかったのである。それは何よりも香港において「街頭」こそが「公」と「私」がせめぎ合う境界領域として公共圏を成すからに他ならない。本書は、そのような香港における公共圏において展開する当事者間の「関係」と当事者の「価値観」を扱った貴重な論集といえよう。

大橋健一(おほし・けんいち) /立教大学観光学部交流文化学科教授・アジア地域研究所員
立教大学大学院社会学研究科博士課程前期課程修了。香港中文大学人類学系研究員、香港大学アジア研究センター、兵庫教育大学等を経て現職。専門は都市社会学・都市人類学。香港関係の著作に『城市接觸：香港街頭文化觀察』(共編著・香港商務印書館)、『香港社会の人類学—総括と展望』(共著・風響社)、『植民地香港の構造変化』(共著・アジア経済研究所)など。

ジャカルタと神戸をつなぐもの —マッチを通じた華人ネットワーク—

● 工藤裕子

くどう・ゆうこ

東京大学人文社会研究科において博士号(文学)取得。(公財)東洋文庫研究員。論文に、「オランダ領東インドの客家系商人—20世紀初頭の事業展開とアジア域内ネットワークを中心に」『華僑華人研究』18号(2021年)、「二つの「中国」とジャカルタの華人社会—国民党派の動向を中心に」陳來幸編『冷戦アジアと華僑華人』(風響社、2023年近刊)。主な研究テーマは東南アジア、インドネシアの華僑華人史、経済史。

マッチは一方で、ヨーロッパからアフリカ、中東の市場を席捲し、インドとインドネシアで日本製のマッチと激しく競合した。そのために、消費者の目を引くデザインが求められたのであろう。

商標データの分析を通じて

マッチラベルは燐票と呼ばれ、世界各地に愛好家がいる。ネットで知り合った東京やインドネシアの燐票家は、いずれもグラフィックデザイナーで、高いデザイン性に惹かれて膨大な数のラベルを収集していた。また神戸にある日本燐工工業会にも蘭溪文庫という日本有数の収蔵品が保管されている。これら日印両国の関係者からの協力を得て、日本から蘭印に輸出された1,200枚ほどのラベルデータを収集し、輸入販売業者と製造者、図柄のデータベースを作成し、商標登録簿や企業、商人の履歴と照合した。そこから、地域ごとの流通業者の類型を抽出することができた。

そのひとつは、中部ジャワで輸入や流通を行ってきた華商で、多くが福建系の茶業や砂糖商の兼業者である。ジャワの宮廷文化の影響が強い現地の人々の嗜好を熟知していたのであろう。1910年代から日本の商社や製造者と関係を構築し、ワヤンなどの現地文化を表象する図案を生み出していった。

バタヴィアの客家系華商も日本製マッチ流通の重要なアクターであった。広東省梅県出身の華人官吏層であり、ジャワで多勢を占める福建系に比べて移住歴は浅い。近代化を推し進めた日本に関心を向け、20世紀初頭に故郷の若者らを日本に派遣して神戸に拠点を設けた。マッチなどの日本製品を神戸から輸出し、ジャワで雑貨品の流通網を構築していたのである。日本人が本格的にジャワに進出する20年

近くも前のことである。

流通史から社会史へ

数年前からは、神戸にゆかりのあったこれら客家の痕跡を探しに、日本や台湾の研究者と共同で調査を行い、資料の収集や子孫へのインタビューを続けている。雑貨の流通で培われたネットワークは、神戸や香港、東南アジア各地の拠点と結びつきながら、同盟会や辛亥革命、国民党への支援組織につながり、さらに華人子弟向けの学校教育でも影響力を及ぼしていたことも明らかになってきた。インドネシアの主要都市で行った現地調査では、彼らの社会的な影響力が現在にも引き継がれていることを再認識したが、インドネシアの歴史の中で語られることはほとんどない。

コロナ禍で現地調査ができなかったここ2年ほどは、インドネシア独立後の動向に軸足を移し、冷戦期の活動に研究対象を広げている。マッチラベルから浮かび上がったインドネシアの華人と神戸とのつながりは、アジア域内の貿易にとどまらず、政治・社会的な活動にも及ぶ。両地の客家のネットワーク研究を通じて、インドネシア華人史の新たな一面を掘り起こしたいと考えている。



オランダ領東インドで流通していた日本製マッチのラベル
上段はスマランで流通していたラベル。ジャワの伝統工芸であるろうけつ染めのモチーフが描かれている。下段左はスラバヤの客家が販売したマッチラベル。オランダのシンボルであるライオンの歯を抜いている図案が植民地への抵抗を表しているのではないかと社会問題になった。下段右は、インドネシアの諸民族を代表する社会団体の名称が記されている。(ジャカルタのヘルマワン・タンシル氏所蔵)

茶貿易からマッチ貿易へ

台北の大稲埕で、1920年代にオランダ領東インド(蘭印、現在のインドネシア)に台湾産の茶を輸出していた一族を訪問した時のことである。おじいさんの代に建てられた豪邸の主人は、「そういえば、茶のほかにはマッチの輸出でかなり儲けたらしい」と教えてくれた。1910年代頃から、日本製のマッチを一度台湾に仕入れ、茶と一緒に蘭印に船積みしていたのだという。

帰国後にマッチのことが気になり、図書館で調べてみた。そこで手にとったマッチラベルの図案集に衝撃を受けた。明治大正期に日本で生産されていた3×5センチほどの商標には、動物、植物、英雄、乗り物、道具、吉祥模様などのユニークな図柄が色鮮やかに描かれている。華僑の手により中国に大量に輸出されていたために、日本と中華的な混合デザインのオンパレードである。あまりの種類多さに圧倒されたが、その中に、ジャワ、バタヴィア(現在のジャカルタ)、スマランなどの地名が記された商標が目に入った。日本の製造者や商社に加えて、現地の華商やインド系商人の名もある。インドネシア向けにデザインされたであろう伝統芸能ワヤン、ろうけつ染めの職人、民族衣装を着たジャワ人、マレー語で宣伝文が記載されているものもあった。これは華人の流通ネットワークの解明につながるのではないかと

ここから茶の貿易ルートに加えて、マッチの流通の担い手を探る旅が始まった。
明治大正期の日本は、スウェーデンと米国に並ぶマッチの大生産国であった。中国をはじめ東アジアから東南アジア、さらにインドへと南へ西へと輸出販路を広げた。スウェーデン製

台湾・中山樓訪問記と 中華民国憲法



写真1/中山樓のある陽明山国立公園の入り口と筆者

中山樓とは

台湾(中華民国)の台北市には陽明山国立公園[陽明山國家公園]がある(陽明山は、大屯山、七星山など複数の山からなる地域である。「陽明山」という山は存在せず、複数の山の総称が「陽明山」である)。この陽明山には、「中山樓」という建物がある。中山樓は、中華民国の国父である孫中山(孫文)の生誕100周年記念事業の一環として1965年10月2日に建設が決定し、1966年11月6日に完成し、同月12日に蒋介石により落成式が行われた建物

である。中山樓は、政府の宴席場、国内外の来賓をもてなす迎賓館などを目的として作られている。なお、孫中山(孫文)の生年月日は1866年11月12日である。
そして、中山樓は、かつて台湾の最高国家権力機関であった「国民大会」の最後の会議場となった場所でもある。ここではこの中山樓について紹介したい。

※本稿において、[]は直前の単語の中国語原文を示し、初出にのみ付した。

中華民国憲法

中華民国憲法第25条は「国民大会は本憲法の規定により、全国国民の行使する施政権を代表する」と規定している。中華民国は、立法、行政、司法、考試、監察の五権分立体制を採っているということは有名であるが¹、国民大会はその五権の上に存在していたのである。すなわち、台湾の立法院選挙では、立法権に対する国民の負託を行い、国民大会代表(議員)選挙で、国民は政権そのものの運営者を選ぶという構造である。国民大会のもともとの権限は、



写真2 / 中山樓の正門



写真3 / 中山樓は、2001年7月2日から発行されている台湾の100元札の裏面の柄でもある



(左)写真5 / 中山樓内の国民大会の議場であった部屋
(右)写真6 / 中山樓内の蒋介石石像



写真7 / 中山樓の外観

写真8 / 中山樓外の看板

総統および副総統の選挙や憲法改正などであった(中華民国憲法第27条)。

ところで、中華民国がその国家機能を台湾に移してからは、台湾では戒厳令により憲法機能のほとんどが停止し、選挙も行われず議員が原則として変更されることのない、いわゆる「万年国会」の状態となっていた(若林 2008 : p.75)²⁾。しかし、1991年12月21日に国民大会の代表(議員)選挙が行われ、1996年3月23日には総統の直接選挙が行われるなど1990年代には台湾の民主化が進んだ。しかし、事実

上、国民大会と立法院という二院制となっている部分があり、その意義に疑義が呈されていた。そのため、国民大会は、2000年4月25日公布・施行の中華民国憲法増補条文[中華民国憲法増修條文]第1条で非常設機関となり、2005年6月10日公布・施行の中華民国憲法増補条文第1条第2項で「憲法第25条から第34条および第135条の規定は、適用を停止する」と規定され、国民大会は廃止となった。

中山樓と台湾民主化

中山樓はその完成から2005年の国民大会廃止まで一貫して国民大会の会場であった。特に、中華民国憲法の効力を事実上停止させていた動員反乱鎮定期限臨時条項[動員戡亂時期臨時條款]は1991年5月1日に廃止され、同日公布で中華民国憲法増補条文が制定されたが、これらの議論が行われた第1期国民大会第2次臨時会議の会場が中山樓であった(議論自体は同年4月22日)。これによって「万年国会」が解消されたため、中山樓は「台湾民主化の舞台」と呼ばれることもあるようである。

中山樓内の展示

中山樓自体は、現在、有料で決められた時間にガイドの解説を受けながら見学をすることができる。基本的には建物自体を見学するようになっている。しかし、パネル写真などで常設展や特別展も開催されている。筆者の訪問時には「中華民国臨時約法展」や「憲政の歴史展」が行われていた。

その意味では、台湾政治や中華民国憲法などに興味がある方は、時期を見て何度も訪問してほしい場所と言える。



写真4 / 中山樓内の国民大会の議場であった部屋



- 1) 五権分立については、日本語では蔡秀卿=王泰升(編著)(2016 : p.40)が詳しい。
- 2) 若林正丈『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会、2008年、75頁。

<参考文献>

蔡秀卿=王泰升(編著)(2016)『台湾法入門』法律文化社。
若林正丈(2008)『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会。

中山樓公式ウェブサイト

<https://chungshanhall.ntl.edu.tw/cht/index.php>
中山樓所在地
台湾・台北市北投區陽明路二段15號

高橋孝治(たかはし・こうじ)

立教大学 アジア地域研究所 特任研究員
台湾・淡江大学 日本政経研究碩士班 訪問研究員(2022年12月末まで)
日本で修士課程修了後、中国・北京にある中国政法大学 刑事司法学院 博士課程修了(法学博士)。専門は比較法(中国法、台湾法)、中国社会を素材にした法社会学。長らく一般企業勤務の傍ら研究活動を続けてきたが、台湾政府フェローシップ制度により2022年は台湾にて研究活動に専念。著書に『ビジネスマンのための中国労働法』(労働調査会、2015)、『中国社会の法社会学』(明石書店、2019)他多数。日本、中国、台湾、香港、韓国で発表した論文・論考は100本を超える。